

# 巻 頭 言

## Editorial

### ディケンズとジョン・ウェイン

Dickens and John Wayne

日本支部長 佐々木 徹

Toru SASAKI, President of the Japan Branch

先日ふとギヤスケル夫人の『シャーロット・ブロンテ伝』を読みなおした。せっかく小説家が書いているのに全然文学的なコメントがないし、これなら(おそらく通常の評価とは異なり)フォースターの『ディケンズ』の方が伝記としてよく出来ているのではないかという印象を再確認。伝記作者としてのフォースターの力量をちゃんと評価できないものか、という気が湧いてくる。しかし、それには彼がものしたランドー、ゴールドスミス、スウィフトといった文人の伝記のみならず、17世紀の政治家たちを描いた一連の著作も読み通さねばならない。これはとんでもない大事業だ。

そこで、ジョン・フォースター研究は後日に委ね、ジョン・ウェインの伝記を手にとる (Scott Eiman, *John Wayne: the Life and Legend*; 2014)。僕はとにかく子供のころからアホみたいに映画ばかり観て生きてきた。頭に入っているたいていの知識は映画から得たものだ。はじめて観たウェイン主演の映画は『マクリントック』だった。1963年の作品なので、7歳の時だ。結構おもしろかった記憶があるのだが、最近ブルーレイが出たので観てみたら、非常にぬるい凡作であった。ともあれ、ウェインの伝記を読んでいたら、意外や意外、そこにディケンズが顔を出している。アイマンによると、ウェインは本を読む速度は遅かったが、読んだことはなんでも覚えているのを自慢にしていた。愛読書はコナン・ドイルの歴史小説、『白衣団』と『ナイジェル卿の冒険』で、歴史に関するチャーチルの著作はすべて読んだらしい。それから、ディケンズも好きな作家の一人だったようで、映画出演や製作の提案があつてそれに興味を示した時は、彼はかならず“Barkis is willin’!”と言ったという。こういう話を読むと涙が出そうになる。しかし、おなじ『デイヴィッド・コパフィールド』でも、ウェインと深いかわり

を持つのはパークスよりもペゴティー氏であろう。ジョン・フォードの『搜索者』(1956)で、ウェイン演じるイーサン・エドワーズはインディアン(先住民族ですね)に誘拐された姪を偏執狂的に探し続ける。その姿はまさにペゴティー氏に重なる。やっぱり、かつてリーヴィス夫人が論じていたように、ペゴティー氏のふるまいにもどこか病的なところがあるのだろうか。

そんなことを思っていた矢先、NHKのBS放送で『11人のカウボーイ』(1972)を観る。この映画ではウェインは子供たちを率いて長い牛追いの旅をするのだが、途上で殺されてしまう。彼を埋めたあと、子供たちは仇を討ち、牛を売ったお金で墓石を買う。それから彼を埋めた場所を探すのだが、それがなかなかわからない。なんと、今度は『骨董屋』ではないか。となると、何を発見するやらわかったものではないから、久しぶりにまた『駅馬車』(1939)でも観てみようかという気になる。ジョン・フォスター研究はいつまでたっても始まらない。